

(様式7)

受理年月日

平成24年5月1日

帯広畜産大学原虫病研究センター共同研究報告書

平成24年4月26日

帯広畜産大学原虫病研究センター長 殿

研究代表者

所属機関 山口大学

職 名 教授

氏 名 度会 雅久



下記の共同研究について別紙のとおり報告します。

記

1. 採択番号 23-共同-11
2. 研究課題名 伴侶犬・補助犬由来の原虫病の制御に関する研究

研究課題名： イヌ由来の原虫病の制御に関する研究

度会雅久：山口大学・連合獣医学研究科

鈴木宏志：帯広畜産大学・原虫病研究センター

1. はじめに

家畜や野生動物に由来する人への感染症が危惧され、その対策が望まれている。しかしながら、伴侶動物等、すでに国内で人と密接な関係にある動物由来感染症への対策も重要な課題である。人の生活に密着したイヌに由来する感染症への対策は、動物由来感染症の中でも最も優先順位の高いものであるが、その対策は決して十分ではない。本研究では、国内で飼育されているイヌにおける原虫（ネオスポラおよびバベシア）の感染状況を把握することを企図した。

2. 研究経過

我々はこれまでに、国内飼育犬においてネオスポラおよびバベシアの感染状況を調査してきた。本研究では、これまでの研究成果を発展させ、ネオスポラおよびバベシアの感染推移を把握するために、原虫病研究センターが保有するイヌ由来血清、そして原虫抗原を用いた血清学的手法による疫学調査を行った。

3. 研究結果

Neospora caninum の血清学的調査は NcSAG1 抗原を用いた ELISA により行った。イヌ血清 216 検体を調査したところ、12 検体 (5.6%) が陽性であった。一方、*Babesia gibsoni* の血清学的調査は特異性の低い P45 抗原を用いた ELISA によってスクリーニングを最初に行った。209 検体を調査したところ、23 検体 (11.0%) が陽性であった。さらに、スクリーニングにより陽性と判定された検体について、BgTRAP 抗原を用いた間接蛍光抗体法および ELISA により確定診断を行ったところ、陽性検体は認められなかった。

4. まとめ

今回の調査により、*B. gibsoni* の診断については、特異性の低い P45 抗原で最初スクリーニングを行い、その後、より特異性の高い BgTRAP 抗原を用いた間接蛍光抗体法あるいは ELISA による検査を行うことによって確定診断がほぼ可能であることが示された。本研究で用いた検体において、*B. gibsoni* の感染が認められなかったことから、飼育環境が適切であることが示唆された。一方、*N. caninum* は陽性検体が認められたが、非特異反応である可能性も考えられるため、今後ウエスタンブロットティングによる抗体の検出等、確定診断を行う方法を検討する必要がある。さらに調査を継続し、問題点を明らかにし、これらの病原体の感染予防対策を行う必要があると考えられる。